

ことはさけるべきやうなこと、まだいかつこ
た大上段的討論ではなく親密な話し合いの場
を通じてなか公通点を抽出そうとする和や

きないといつた状態です。村研の共同体的効用が作用しているなどとヒガミをもつものがでて来る危険もありそうです。

かな会であること、ここに村研の基本的性格とあの魅力が存することはいうまでもあります。しかしこの「実証」と「詰し合い」という村研の長所が認められてときには小心者の理論的発言停止ひいては理論軽視というような、雰囲気をレーテントに生みだしているような気がしてなりません。そしてこのこと

のです。
理論への志向として次の三つのレベルある
いは方向があると思います。

【 報告者は自己の調査の基本的な問題点と「課題」との連関をもつと明確に示す。

もちろん基本的な問題点は調査対象のもつ歴史的意味と特殊性を高めさせ、それぞれ個性的

理論への志向 — 内部での理解と 比較可能な図式 —

比較可能な図式(一)

すでに多くの人から何度も繰返されはじめ

なじむかりきったようが薬莢をからへて危難ですが、なにか書けという編集者の要求にしたがつて少々勝手なダグをこねてみたいと思ひます。

村井の在り方としてなによりもまづわが國のムラの特性をその深みにおいて実証的に分析しようとするところにあるのだから抽象的な一説論をいきなり公式的に適用するような

いたつて反応のよい私などにも問題の所在がややはつきりしてきたように思います。それでもすぐに矢木氏が指摘されているようないい調査しかもあわせていない連中は、いか発言しようとしても抽象論という自賛のまからか隣のもとボソボソした話しかで報告と討論の連結が不明確であつたり、報告者が基本的な問題点を明確にするのを意識的に避ける傾向がみられたりしました。また討論も少数者に集中してしまったようです。自信のない調査しかもあわせていない連中は、いか発言しようとしても抽象論という自賛のまからか隣のもとボソボソした話しかで

かげているかもしれません。また会員がそれぞれ自己の能力に応じていろいろの問題の所在を発見したり触発されたりするという実質的な成果は非常にあります。この意味で討論に村研の性格が満ちてているようです。とくに乍平の大会のようて討論が活発だと

もちろん基本的な問題点は調査対象のもの歴史的意味と特殊性に応じてそれぞれ個性的なものであるかも知れません。しかし具体的な資料に即してそれぞれ報告者の視点が語られることがよつて、たんにそれぞれの対象地の深い歴史的個性が知られるだけでなく、興味なつた分野での関心や問題点の差異やを明確に知ることができます。

構造とか組織とかの基本概念の使用上の喰みちがいが発生する根源もここである程度明るかになると思います。

II 資料分析の具体的枠組を示すこと。
分析のための枠組は工から派生するものかも知れません。しかし対象の本質規定、原理的な視点と対象分析の具体的方法との間に何等かの距離があると思います。したがつて対

象把握のための操作的な手続やここで使用される概念には相当の喰いちがいが発生する余地があると思います。村研のあり方は「マクロな問題を背景としてミクロなアプローチをしようとするものだ」（有賀先生通信十八号といわれています。しかしたとえばムラの構造を見る場合村の内部で主として家庭内の機械的機能的歴史的変化をたどる場合と、より外との関連に着目して外部社会との関連が内部に及ぼす影響や、内部のそれへの対応をみていく場合とでは、もがつた分析方法や構組ができるようになります。もちろん内部での理解はそれをつぶして外部社会の歴史的性質に対する深い知識を前提としてはじめて可能なものです。他の社会から全く孤立した村莊や理解はそれをつぶして外部社会の力（商品化・貢祖や山林に対する政治権力・分業の進展等）の作用がせんから外部社会の力（商品化・貢祖や山林に対する政治権力・分業の進展等）の作用がなんらかの程度で村落の内部に浸透しそれへの内部における対応があるとみられます。逃散したり階層分化したり共同したりしなければ生きていゆけない条件は、たんに云う内部での自己的な生産関係（考え方ねらかどうか疑問ですが）だけによるものではなく外部との連関のもとに作用しているわけであります。事実中村先生たちの業績（史的分析）では「すべて村落の中でみたい」という視点に立たれていましたが、家連合の要機となる労働・水利・山林の共同組織の架橋そのものがムラを包む外部社会を前提とする商品化や山林に対する権力の支配・賃租等、包括した歴史的段階に対する深い知識の蓄積を前提とされています。しかし「家は村落という構造の中で、それがいかに組合わさつていてるかを見えて上位意味と云ふかむべきものである。同時に家の性格に対する深い知識の蓄積を前提とされています。しかしながら、金を出していく上で、いかがむべきものである。同時に家の性質をつかまねばならない（史的分析四頁）

「という視点と構造ではたゞ一村の構造が明確になるが疑問と思われるのです。『どういうものを家といふかについて、共同体の関係において、その単位といふ線で定めるばかりではないであらう』（同三頁）一節点は著藤一といわれていますが、同様の論理で、どういうものをムラといふかについては、ムラを包括する外部社会との関連においてその単位といふ線で定める他はないと言えると思います。そうでなければ家や家連合がわかつたとしても、団の階級的統一をうながし」「入為的政治的に真打ちされた集団性の外枠をあたえるもの」（松原氏）のようないふものが浮び上つてくるかもしれません。またムラが「社会意識による相互制約の自足的組織、村自体の自主性自律性をもつ」という自然村（鈴木（榮）、喜多野先生）として理解されてくるのも後者の理解の方から当然浮び上つてくると思ひます。なぜならば「我々」という登場は「他者」の存在を前提し他者との対比においてはじめてあらわれるものとみられるから自然村のムラという意識も、自然村がさまざまの契機で関連している他村や外部社会の状態あるいは外部権力との対比においてはじめて明確な意識をもつたものとしてあらわれまたとええることができるのだと思ひます。この村落を単位として構造化する契機は歴史的に変化するとの関連の状態だと思ひますがちょうど家のまとまりの内部上の契機が血縁であつたように、ムラの名義上の契機として地域性があらわれていると思います。

それぞれの報告者が以上のようないふ基本的視点や論理・具体的な分析の枠組や方法を明確にしないために、たとえば「地域社会的指網

などという非歴史的な念がとびだしてきて、余計な混乱を惹起したりするのだと思います。来年度の課題が「村と政治体制」となったのはこの意味でも非常に適切だと思います。

配関係に焦点をしほろとする主張も、「同族結合」「組結合」といった國式も、なにほどか総合と構造比較のための試みであつたと思ひます。なにが共通の総合の方法、比較のための統一的國式をもたないかぎり、たとえばいろいろな地域のいろいろな性格の村落構造について比較検討を試みたいという提案があつたところで村落構造の厳密な比較は不可能であると思います。